

## 英文学教師 漱石とコルタサル

——初期作品におけるキーツ，世紀末芸術の影響——

今 井 洋 子

### 要 旨

漱石とコルタサルの教師としての経歴と，その英文学教師として教えた講義の内容を比較する。そして，彼らが教え，また偏愛したイギリスロマン派のキーツ，世紀末文学のド・クインシー，ゲーティエ，ロセッティなどの影響が，いかに彼らの初期作品の中に色濃く見られるかを検証する。

キーワード：漱石，コルタサル，英文学教師，キーツ，世紀末

### はじめに

漱石とコルタサルという，日本とアルゼンチンを代表する偉大な文学者を比較文学の観点から研究するいくつかの小論を発表してきた。そもそも時代も国籍も異なる二人の共通点に気がついたのは，漱石の『草枕』に関する研究論文<sup>1)</sup>を読んで，この作品の重要なモチーフがラファエル前派の画家，ジョン・エベレット・ミレーの『オフエリア』であると知った時であった。筆者の専門とするコルタサルも『オフエリア』と同様の「水に浮かぶ女」のモチーフが多く見られる，というところを出発点として検証してみると，時代と場所の差こそあれ，彼らの生い立ち，略歴，病歴，文学的影響，作品のモチーフなど，様々な類似点が発見でき，最初の論文<sup>2)</sup>となった。次に，二人が共通して深く影響を受けていた，アメリカの作家，エドガー・アラン・ポーの『ウィリアム・ウィルソン』という短編から想を得て，「分身殺し」をモチーフにした作品，漱石は『ころも』，コルタサルは『水底譚』を書いたのではないかという仮説を立てた<sup>3)</sup>。そして，次に二人の作品の女性人物について分析し，「宿命の女たちはなぜ殺されたのか<sup>4)</sup>」と題して論じた。

今回は，遡って，彼らが文学者となる以前の教師時代に焦点をあてて，彼らの文学者として萌芽の時期を詳しく見てみる。そして，二人の文学の源泉を考える上での鍵となる彼らの教師時代，とりわけ「英文学教師」としての二人の研究，講義内容を比較し，それらがいかにその後の彼らの作品に生かされたかを調べてみることにする。この研究が可能になったのもここ数

年のうちに相次いで出版されたコルタサルの少年時代や教師時代に関する詳しい研究書<sup>5)</sup>のおかげである。

漱石の略歴や彼の文学の源泉について詳述するのは、あくまでもコルタサルとの比較に必要であるからである。漱石に関する膨大な先行研究はコルタサルの研究に多くのヒントを与えてくれた。中でも教師時代に培った英文学の影響関係の研究は、これまで手薄であったコルタサルの初期短編の材源研究に大きな役割を果たすことを期待している。

## 1. 教師時代の漱石<sup>6)</sup>とコルタサル

### (1) 中学・高校教師時代

漱石は慶応3年(1867)町方名主の父、夏目古兵衛直吉と母、千枝の5男として生まれる。翌明治元年(1867)塩原昌之助の養子に出されるが、その後9歳で実家に戻される。15歳の時、愛した母死去。父とは折り合いが悪かった。明治17年東京大学予備門に入学、英文学を進路に選ぶ。明治20年(1887)兄二人が死去、家運衰退にむかう。同年、第一高等中学校で主席をとり、以後卒業まで主席を通す。

漱石が初めて教師になったのは、第一高等中学校で落第した明治19年(1886)、19歳の時とされている。家が豊かでなかった漱石は、学費を自分で賄うために私塾江東義塾で英語で地理や幾何学を教えた<sup>7)</sup>。まだ英文学は教えてはいないものの、初めての教壇に立った印象は格別で、後に『永日小品』でその時の思い出を語っている。

次に、明治25年(1892)から東京専門学校、現在の早稲田大学で、文学部の英語講読の授業を担当している。まだ彼は帝国大学文科大学英文学科の二年生であった。教科書としてはゴールドスミスやミルトン、バイロン、ド・クインシーなどを使用した<sup>8)</sup>。優秀な教師との評判をとった反面、辞職勧告運動が起こっているといううわさに困惑し、辞職を決意したこともあった。教師人生の最初の挫折であった。

明治26年(1893)帝国大学文科大学英文科を卒業、大学院に入学し、高等師範の英語嘱託として一年半教鞭をとる。学生時代に軍事教練に反対する英作文を書いたこともある漱石にとって、軍隊さながらの厳しい規律を要求する高等師範は最後まで馴染めない学校であったらしく、後に「私の個人主義」の中で「然し教育者として偉くなり得るやうな資格は私に最初から欠けていたのですから、私はどうも窮屈で恐れ入りました。…然し何うあっても私には不向きな所だと思われませんでした」と述べている。高等師範での教師体験は、「自分は教育者に適さない人間である」と確信する役割を果たし、それを折に触れ口にする始まりとなった。

明治28年(1895)愛媛県尋常中学校(松山中学)の嘱託教員となり、松山に赴任。何故遠く離れた松山へ行ったかについては諸説あるが、校長よりも高給であったのも理由の一つだと言われている。漱石が赴任した当時の松山中学の様子は、田舎ののどかな学校のイメージとはかけ

離れ、「地方の有志、県会議員などを後ろ楯とした生徒の団体が無闇に威張り散らす、校長始め教員達は、其内部一致せず、外生徒の跳梁を奈何せん<sup>9)</sup>と云う有様であった。」小説の坊ちゃんは、こうした環境で生徒と問題を起こしたり同僚教師と衝突したりしたが、漱石は、その学問と識見の高さで彼らを圧倒した。職員室においても、一人違う世界にいるかの如き泰然自若とした態度であったという。教え方は明快、かつ至れり尽くせりのわかりやすい授業で生徒の評判も上々であった。最初のうちは松山の温泉にも、学校にも生徒にも満足していたかに見えた漱石であったが、秋になる頃には一転してこの地を離れることを望むようになる。愛想をつかした原因は、「松山中学の生徒は出来ぬ癖に随分生意気に御座候<sup>10)</sup>」と友人に手紙で語り、また離任にあたり「何故松山を去るかと反問せられる人があるだろう。この反問に対して私は答える、それは生徒諸君の勉学上の態度が真摯ならさる一事である<sup>11)</sup>」ということもあったかもしれない。しかし恐らく最大の原因は、住田校長排斥のストライキに対する義憤であろう、と言われる。「その夜おれと山嵐は此不浄な地を離れた、船が岸を去れば去るほどいい心持がした」という坊ちゃんが松山を去る場面での述懐は、漱石本人の気持ちであった。その後、漱石は二度と松山の地に足を踏み入れることがなかった。わずか一年の滞在であった。

明治29年(1896)熊本の第五高等学校の嘱託教授に転任、すぐに教授に昇格した。ここでの教授法は、徹底した多読主義で、生徒に対しては厳格であった。通常の講義では、漱石お気に入りのド・クインシーの『阿片常用者の告白』やG.エリオットの『サイラス・マーナー』などを読んだ。一方生徒に対する面倒見もよく、課外講義でシェークスピアの『ハムレット』や『オセロ』なども教えている。中でも『ハムレット』の講義は面白いと評判であった。

この後、明治33年(1900)文部省より英国留学の辞令を受け、ロンドンへ出発。『文学論』の序にある、あの有名な「最も不愉快な2年間」を過ごす。ロンドンでは大量の本を買い込んで下宿にこもり、読書と研究に没頭する。主に最初のうちは18、19世紀の詩人や小説家の作品を読んで<sup>12)</sup>いた。

明治34年(1901)ロンドンにて神経病を発症しながら『文学論ノート』執筆。

明治35年(1902)神経衰弱が昂じる。翌年1月帰国。

第五高等学校休職中であったが、彼は熊本に帰る意志はなく、周囲の尽力のおかげで同年、第一高等学校英語嘱託と東京大学講師の辞令を受ける。時代は日清戦争に勝利し、日英同盟も締結、ナショナリズムが高揚していた頃であった。

コルタサルは1914年、ベルギーでアルゼンチン大使館勤務の下級外交官の子供として生まれた。家族と共に第一次大戦下のヨーロッパを転々とした後、1918年、4歳の時、アルゼンチンに帰国、ブエノスアイレス郊外の町バンフィールドに落ち着く。すぐに父親は家族を捨てて出奔してしまった。コルタサルは妹と共に母親に育てられ経済的な理由から師範学校 *Esuela Normal Mariano Acosta* に進学した。1935年同校を優秀な成績で卒業した。一時ブエノスア

イレス大学文学部に在籍したが、家計を助けるために退学し教師の道を歩み始める。

コルタサルが初めて教鞭をとったのは、1937年、ブエノスアイレス州のパンパのど真ん中にある地平線しか見えないような辺鄙な田舎町ボリバルの国立高等中学校 *Colegio Nacional de Bolívar* であった。時に彼は23歳であった。偶然にも漱石と同じように「地理」を教えるはめになった。彼の希望はもちろん「文学」であったが贅沢は言えなかった。彼の仕送りで母親、祖母、妹からなる家族を養わなければならなかったのだ。ブエノスアイレス時代のように文学の議論をする仲間もなく、散歩する場所といえば中心の広場しかない町での生活は、あまりに寂しく、辛いものであった。ロンドン時代の漱石のように、彼は下宿にひきこもり、ありとあらゆる文学の古典に読み耽る。フロイト全集、イギリス、アメリカの小説、詩集、ルイス・キャロルの全集、カフカ、ブリーのギリシャ史、また漱石も愛読した T.ド・クインシーの全集、ボッティチェリの膨大な文献、ルネッサンスの歴史、などなど。なかでもキーツの詩集は、小さな町をめぐる散歩の際にも常にポケットにあり、彼がもっとも愛した本と言っていいだろう。この時期の読書は、彼の死後刊行された初期短編集 *La otra orilla* (向こう岸<sup>13)</sup>) の自伝的短編 *Historia de Gabriel Medrano* (ガブリエル・メドラノの話<sup>14)</sup>) に詳しい。しかし孤独とその町の文化の欠如が、彼を精神的に追い詰め、彼はここで最初の神経症の兆候に苦しむ。後に見るようにこの時期、神経症から脱するために漱石の『夢十夜』に似たポー風の幻想的短編を書き始めている<sup>15)</sup>。1939年同じくブエノスアイレス州のもう少し大きな町チビルコイの高等学校に転勤になる。漱石が松山に戻らなかったように、コルタサルがボリバルを訪れることは二度となかった。『坊ちゃん』のモデルと取りざたされた松山の人々が複雑な気持ちを抱いたのと同じく、ボリバルの人々は偉大になった作家が、ボリバルのことを全く無視するか、否定的なトーンでしか語らないことに不満をもらしている<sup>17)</sup>。確かに生徒たちはコルタサルに親近感を抱かず、教員室でも彼は孤高の人であった。彼はこの時代を振り返って「想像しうる最低の学校だったけれど、二三人の一生の友人を得た」と述懐している<sup>18)</sup>。現に、彼の書簡集には、ボリバルの元同僚の友人たちと交わした手紙が多く含まれ、彼らとの交流が、漱石が松山での友人、子規のおかげで作家への一歩を歩みだしたように、作家コルタサル誕生の鍵となったことが読み取れるのである。

1939年、ボリバルで窒息寸前であったコルタサルに、チビルコイの高等学校への転勤の話をもたらししたのは一本の電話<sup>20)</sup>だった。チビルコイで「地理」を教えていた教師がボリバルの校長に栄転するので、代わりにチビルコイで地理を教えてくれという話だった。チビルコイもブエノスアイレス州の田舎町ではあったが、少なくともボリバルよりは都会で、なによりブエノスへは汽車で三時間しかかからなかった。おまけに給料も上った。彼は二つ返事で引き受けた。最初のうちはコルタサルの異常な身長(2メートルを越した)やフランス訛りの r の発音をからかっていた生徒たちも、彼の博学と親切的な教え振りにすっかり従順になった。町には文化的な集まりもあった。コルタサルは以前よりは自信を持って教壇に立ったし、チビルコイでの教師

生活は順調と思われた。しかし、時代の空気は変化しつつあった。ナショナリズムが急激に高まり、軍部や輸出産業界が軍人を大統領に当選させるなど、国全体に不穏な空気が広がっていた。1939年、ヨーロッパで第二次世界大戦が勃発すると、軍内部では枢軸国側に与する派と、米国派とのあいだに激しい対立が起こる。1943年にはペロンを黒幕とする軍による大改革が行われる。政治活動は禁止され、学校教育にはカトリックの授業が義務付けられ、大学も政府の管理下におかれるなど、独裁体制は強化された<sup>21)</sup>。チビルコイではナショナリズムを高揚するような教科書だけが読まれ、コルタサルが選んだ首都から持ち込まれた文学のテキストは明らかに場違いなものになっていた。

教室から定宿のホテルへと直行、籠もりっぱなしで読書に耽るコルタサルに対する、地方都市の悪意に満ちた噂は引きもきらなかつた。彼は高等中学校を訪れた大司教の指輪に接吻しなかつた唯一の教師であつたという噂もその一つであつた。田舎町でも保守派と進歩派の対立が目に見えて激しくなっていく中で、進歩派とみなされていたコルタサルは<sup>22)</sup>、保護者に面罵されたり、保守派の新聞に皮肉られたりしながらも、なんとか教壇に立ち続けていた。鳥流しのような地方での教師生活は彼を精神的に徐々に追い詰めていった。しかし彼の仕送りに頼っている家族のために投げ出すことは許されなかつた。この頃昂じた神経症の治療法としていくつかの幻想短編を書いている。その一つが作家として世にでるきっかけとなつた『占拠された家』<sup>23)</sup>である。コルタサルを「政府支持の熱意の欠如、共産主義者、無神論者」などと呼ぶ国粋主義者たちの非難はますますあからさまになり<sup>24)</sup>、もはや我慢の限界に達していた1944年の7月、またもや一本の電話が彼を奇跡のようにチビルコイから救い出してくれた。それはブエノスアイレス文学部時代の古い友人からであつた。彼はメンドサの国立クヨ大学での「北ヨーロッパ文学」の講座の担当を降り、文部省へと栄転したばかりだつた。つまり、その友人はペロン派に属していたことになる。(後にそのことがコルタサルを政治的に微妙な立場へと追いやることになるのだが。)旧友は自分の代わりにその講座を担当することをコルタサルに申し出てくれたのだ。正式な選抜試験は年末に行われるはずだから、チビルコイの高等中学校には休職願ひを出して行けとの話だつた。願つてもない話だつた。コルタサルの退場を待っていた保守派の同僚や保護者、大司教までが陰で祝杯を挙げた。コルタサルは大急ぎで荷物をまとめてメンドサへ旅立つた。丁度宿敵となるペロンが副大統領に任命された時のことだつた。

## (2) 大学教師時代

明治36年(1903) ロンドンから帰国した漱石は、東京帝国大学で講師として英文学を講ずる依頼を受ける。大学への奉職については、前任者のラフカディオ・ハーンの後任になるという重荷のほか、学生たちの反発もあり気が進まないものであつた<sup>25)</sup>。

講義は「英文学概説」と「英文学形式論」、一般講義として『マクベス』『リア王』『ハムレット』などのシェークスピアを大学を去るまで講義し続けた。大学での講義は、案の定初めは

不評であった。とりわけ「英文学概説」は、文学の形式を理論的、科学的に分析しようとするもので、英文学への挫折感に苦しんだ漱石が、ロンドンの下宿で神経を病むまで「文学とは何か」を考えつめ、ノートをとり続けた成果であった。しかし、それはそれまでのハーンの感情に訴えかけることを主眼とした講義と比べると難解で無味乾燥だと学生たちには受け取られた。学生たちの受講態度も悪く、試験の結果も悪いのを見て、漱石はいよいよ嫌気がさし、辞職の決意をする。しかしそれは叶えられなかった。一方、シェークスピアの講義は立錐の余地がないほどの大盛況だった。後期に入って、「英文学概説」の授業は文学の内容論となったが、相変わらず理論的なもので、「英文科の学生は美しくあるべき英文学の柔肌を冷たいメスで切り裂かれるような印象を抱いた<sup>26)</sup>」という。この講義は後に『文学論』として出版された。明治38年から、後に『文学評論』として出版される「18世紀英文学」の講義を始めた。『文学論』も『文学評論』も漱石の愛するキーツなど18、19世紀の英国のロマン派詩人や世紀末の文芸などを材料に文学の形式、内容、意味を理論的に分析しようとする試みである。講義そのものはメスのように切れ味鋭いものであったというが、このころ神経衰弱はますます激しくなり、青い顔をして大きなため息をつく様子は学生たちを心配させるほどになっていた。

明治38年(1905)『我輩は猫である』を刊行、教師を続けながら作家としてのスタートを切る。時に38歳であった。この頃手紙で「教師として成功するよりはヘボ文学者として世に立つ方が性に合う<sup>27)</sup>」と書いている。明治39年、『坊ちゃん』『草枕』を出版。明治40年(1907)最終的に東京帝国大学講師の解職願いを提出、朝日新聞に入社して筆一本で生きることを選ぶ。

結局、漱石は12年間教職についていたことになる。作家専業となって亡くなるまでがわずかに10年であったことを考えると、彼の教師時代はかなり長かったと言えるだろう。

1944年7月、コルタサル<sup>28)</sup>は、チビルコイで電話を受けたわずか二日後には汽車に飛び乗り、ブエノスアイレスから1000キロ離れたメンドサに希望と不安を胸に降り立った。おりしも首都から遠く離れたメンドサにも政治の暗雲が漂っていた。1939年創立の真新しいクヨ大学にも、創設者が追放されるといった改革の嵐が襲ってきていた。ペロン大佐に後押しされたファレル将軍の政権は、初めのうちドイツ・ナチスとイタリア・ファシズムのシンパであったが、1944年の1月には手のひらを返すように枢軸国と断絶し、1945年3月、戦争の大勢が明らかになっているのにドイツに対して宣戦を布告している。政治家、大学人、マスコミに至るまで疑心暗鬼の不安な時代であった。

コルタサルは連合国側に好意を抱いてはいたが、基本的には自由な無党派で、政治よりもアカデミックな向上心を持つ28歳の若き教員であった。クヨ大学に来て、それまでの週16時間の授業から、わずか3講座、週6時間の授業になり、本当に教えたかった「文学」の授業が<sup>29)</sup>ついににもてることに大満足の手紙を友人たちに書き送っている。

ちなみに彼が担当した講座については完璧なシラバスが<sup>30)</sup>残されている。1944年度「フランス

文学Ⅰ「19世紀のフランスの詩、ボードレー、ベルレーヌ、マラルメ」19世紀初頭のロマン派からネルヴァル、ゲーティエなどを含む」「フランス文学Ⅱ「ランボーから今日までのフランスの詩」」「北部ヨーロッパの文学「19世紀初期の英国の詩：キーツ」」の3講座であった。注目すべきはチャーサーから、ウィリアム・ブレイク、ワーズワース、コウルリッジ、バイロン、シェリー、特に大好きなキーツなど、漱石が大学での講義で扱う詩人たちと全く同じような詩人について講義していることである。さらにシラバスに付記された参考文献のリストの中に漱石文庫に所蔵されている本が何冊かあった。<sup>31)</sup>ほぼ半世紀の時を越えて彼らは同じ文献を基に同じような作家たちについて講義していたのである。もっとも講義の内容に関しては、漱石の場合、『文学論』や『文学評論』で確かめることができるように、漱石自らが打ち出した理論的、科学的方法によって文学の何たるかを解明するためにこれら西洋の詩人や作家の作品を使用したものであった。一方コルタサルの場合は、あくまで文学史に忠実に順を追って詩人や作家を紹介し、その特徴やテーマを分析しようとするものである。それは東洋人である漱石が、西洋文学を前にした時、その良さを感性のみで理解することの不可能性に苦悩した結果であろうし、ベルギーで生まれ、幼い頃から西洋の文化の中で育ったコルタサルにとっては西洋文学を理解するのに科学的分析は必要ではなかった故でもあるだろう。いずれにせよ両者共通のお気に入りの英ロマン派詩人、世紀末芸術家に多く時間をかけていることは確かである。

さて、コルタサルの授業は最初わずか2名の受講生しか来ないということがあったにせよ、やがては彼の博学と丁寧な授業に評判は上っていった。しかし、翌1945年にはアルゼンチンの政治的状況はより危険なものとなり、大学にも不穏な空気が満ちてきた。学内では創始者を支持する保守派とペロンを支持する民族派の対立が起こり、学長は何度も交代させられる。政治にも、学内の内紛にも距離をおきたかったコルタサルも、たまたま彼を招聘してくれた友人が民族派だった関係で、この対立の嵐の渦中に巻き込まれてしまった。<sup>32)</sup>1945年8月、広島に原爆が落とされて第二次世界大戦は終結した。しかし、アルゼンチンではこの後30年にわたって政治を牛耳るペロンが表舞台に躍り出た。政府の大学介入はいよいよ露骨になった。各地で盛んになった学生の抗議活動に対し、教授会はクラス閉鎖を断行、ついに政府は大学閉鎖を命じた。これに抗議して同年10月、5名の教員、23名の学生が大学を占拠し立てこもるといふ事件が起こった。“若き熱血教師”コルタサルはその中の一人だった。コルタサルのピアノ演奏で国歌を歌って氣勢を上げた彼らも、5日後騎馬警官隊によってあっけなく排除され、教員は2日間警察署に拘留された後釈放された。実際のところ、彼は老獪な両陣営に踊らされていたのだ。結局この事件がコルタサルを大学から永遠に去らせる引き金になった。彼が失望したのは、ペロニズムだけではなく、権力の顔色を見て裏切りや騙しを平気で行う大学人のあり方であり、<sup>33)</sup>自分のことがナチスやファシストと呼ばれることに対する驚きと怒り、彼の大学教員としての資格詐称の告発に対する怒り、<sup>34)</sup>そういったものすべてに彼は疲れ果てていた。綿密な準備をして誠心誠意丁寧な授業をしていたにもかかわらず、学生たちのレベルが低く、彼の

文学の講義について来られないことに対する失望もあった<sup>35)</sup>。その頃、詩集やいくつかの短編<sup>36)</sup>を書き、文学コンクールに応募したりしていた彼は、作家として生きたいと思ったのである。それは奇しくも漱石が大学教師を辞する時に思ったことと同じであった。

1945年末、コルタサルはブエノスアイレスに戻り、1946年4月には休職願、6月には正式の辞職願<sup>37)</sup>を提出、再びメンドサに戻ることも、教壇に立つこともなかった。8年間の教師生活であった。同年2月ペロンは選挙に勝ってついに大統領にまで登りつめていた。

その後コルタサルは公認翻訳士の資格をとるために猛勉強し、フランス語と英語の翻訳者の資格をとった。孤独と不安の中で神経症に苦しみながら、その病気の治療のための悪魔祓いに幻想短編を執筆した。600ページにもものぼるキーツに関する研究書も執筆した。エドガー・アラン・ポーの全集や、T.ド・クインシー、ロビンソン・クルーソーなどの翻訳も手がけている。

1951年フランス政府の奨学金を得て渡仏した同じ年、最初の幻想短編集『動物寓意譚』が出版された。コルタサル37歳の時であった。ちなみに漱石の最初の小説『我輩は猫である』が世に出たのは、漱石38歳の時であった<sup>38)</sup>。

## 2. 漱石とコルタサルの初期作品に表れた源泉としての英文学

漱石とコルタサルが英文学教師として講義でとりあげ、「文学」評論の著書で扱った詩人たちを二人はどのように捉えているか、とりわけ心から愛した詩人キーツや世紀末の芸術家たちの作品が、彼らの作品にどのような影響を与えているのかを見ていこう。

### (1) 英国ロマン派、キーツ

漱石は若い頃から英国ロマン派のシェリー（1792-1822）や、ジョン・キーツ（1795-1821）の詩に親しんでいた。ロマン主義は、17世紀の科学の発達に伴い合理主義が排除した神や悪魔、幻想や狂気という非合理の部分に目を向け、個人の自由な感情を解放しようと18世紀から19世紀にかけ展開された文学運動である。しかしこの理性の枠をはみ出す熱情をもって合理社会の中に生きる時、そこに軋轢が生じる。そこから分身などのテーマも生まれる<sup>39)</sup>。漱石の暗い部分はそこに共鳴した。漱石は正岡子規宛の書簡で「理性と感情の戦争益劇しく恰も虚空につるし上げられたる人間の」不安に苦しむ時、シェリーの詩を読んで自分と同じ感情をもつ人を見出し、「大いに愉快<sup>40)</sup>」を感じたと告げている<sup>41)</sup>。

一方、キーツの詩の中で発見したものは、学生時代に早くも「英国詩人の天地山川に対する観念」と題する講演を行って注目を浴びていたことから、出口保夫が指摘するように、先ずは「自然美<sup>42)</sup>」であった。漱石は1900年10月末、ロンドンに着いてから、二ヶ月あまりのうちにかなりの量の書物を買っている。ワーズワース、シェリー、キーツなどの詩集と戯曲であ



った。2月に入ってから、キーツをかなり集中的に読んでいたと思われる形跡がある。漱石がこの際読んでいた『キーツ詩集』は1899年版のホートン卿が編集したもので、東北大学図書館所蔵の同著の余白には漱石の批評が詳細に書き込まれている。同著はコルタサルが600ページの大著 *Imagen de John Keats* 『ジョン・キーツの肖像<sup>43)</sup>』を書く際の底本としたものだ。「2月13日の『日記』には、漱石はキーツの『1817年詩集』の最初の詩「小高き丘に爪先立ちて」の“寂しげに咲く花を見た…”の情景描写が気に入って「面白キ句ナリシ故此ニ書キタリ」と記しているが、おそらく彼の絵画的ないしは、発句的自然美の表象に共感を得たのだろう」と出口保夫は指摘する。ロンドンに来てから彼がもっともよく読んだと思われるのはシェリー、キーツらロマン派詩人であり、彼の「検東なき読書」体験の中で、もっとも深い感動を与えた作品も、これらロマン派詩人たちであったにちがいない。その深い感動は、しかし、全面的な共感というわけにはいかなかった。漱石の書き込みには、例えばキーツの恋愛観などに対する疑問符も多く記されている。故にこそ「その幽霊の様な」文学の科学的な分析と学問的な構築へと彼を駆り立て、『文学論』の執筆へと向かわせたのであろう。<sup>41)</sup>

コルタサルは、幼年時より、ポーの作品を愛読し、幻想や意識下の不合理な世界に強い興味を抱いていた。彼が英国ロマン派に近づくのは必然であった。彼が最初に書いたのはロマン的な詩集で、次にはロマン派の詩人たちのようにギリシャ神話に題材を採った *Los reyes* (王たち) という物語詩であった。

コルタサルも肌身離さず『キーツ詩集』を携行していたが、彼の読み方は漱石とは少し違った。若きコルタサルは若きキーツの感覚に寄り添い、自らの境遇をキーツのそれに重ね合わせ<sup>45)</sup>、まるで自分の魂の声と思えるほどキーツの詩に共感していたのである。<sup>46)</sup> 例えば、同じ『1817年詩集』を論じたコルタサルが目にしたのは、漱石が「自然描写」に感じ入ったのに対して、キーツが過ごした眠れぬ一夜を詠った『夢と詩』の部分である。彼はこの若いキーツの詩の中に後のキーツの詩の中心テーマとなるもの、美の永遠性への憧憬、また『エンディミオン』や『レイミア』の萌芽を読み取っているのである。

『エンディミオン』や『レイミア』は二人が共通して、深い共感を寄せる作品である。キーツのギリシャ神話を基にしたこれらの詩に詠われる「女性像＝魔性の女」こそ、彼らの心を強く捉えたものであった。漱石は日記によれば、2月19日にはキーツ詩集の『エンディミオン』まで読み進んでいる。筆者がこの度東北大学図書館所蔵の『キーツ詩集』を確かめたところ、彼は『エンディミオン』の余白に二度 Circe (キルケ) と書き込んでいる。<sup>48)</sup> キルケとはギリシャ神話に登場する魔女である。気に入った人間の男がいると島に連れて行って養い、飽きると魔法で獣や家畜に変えたという魔女は、漱石が後の作品の中で何度も描いた魔性の女、<sup>49)</sup> *ファム・ファタール* 宿命の女の原型である。

コルタサルにもまさしく『キルケ』<sup>50)</sup> と題する短編がある。これは、ブエノスアイレスに住む

美しい娘デリアが、彼女に恋する若者を次々と殺していくという、「キルケ」の現代版である。この短編はコルタサルの評論『キーツの肖像』と同じ時期に書かれたものである。コルタサルがキーツの詩からインスピレーションを受けて執筆したのは明らかである。Ana Hernández del Castillo は、「コルタサルは女性の本質を、男を所有し、吸い尽くし、破壊に導くものと考えている。そして後の自分の作品に登場する女性の否定的側面ばかりをキーツの作品に探そうとしている<sup>51)</sup>」と指摘している。

キーツの詩には、『レイミア』のように正体は蛇である女や、何人もの男を手玉にとる『異常な美女 La Belle Dame sans Merci』のヒロインや、死んだ、愛する男の首を鉢に植える『イサベラとバジルの鉢』の主人公など、漱石とコルタサルが共通して持つ“女性像—ファム・ファタール<sup>52)</sup>”の原型には事欠かない。100年を超える時空を超越して、この三人の“作家”は魔性の女を恐れながらも惹かれる、同じような感性を共有していたに違いない。

この女性像は19世紀半ばに始まるラファエル前派を含む世紀末の画家や詩人たちが偏愛した<sup>53)</sup> 宿命の女<sup>54)</sup>へ引き継がれ、当然二人の興味もここにつながっている。次の章では、二人が強い影響を受けた世紀末芸術について検討し、二人の作品に与えた影響について見てみよう。

## (2) 世紀末

漱石の作品と「世紀末」の関係を論じる研究は江藤淳の「漱石と英国世紀末芸術」（『国文学』昭和43年2月号）に始まるが、その後特にラファエル前派との関連についての研究がなされるようになり、1994年の尹相仁の『世紀末と漱石』<sup>53)</sup>が決定的な本格的な研究と評価されている。ここでは主に彼の研究による漱石の作品と世紀末の影響関係を参考にしながら、コルタサルの作品と世紀末の影響関係の類似点を見ていくことにする。

「世紀末」とはフランス語の *fin de siècle* の訳語であるが、必ずしも19世紀の終わりまでを指すのではなく、19世紀半ばのラファエル前派の時代からベル・エポックの終焉、すなわち1914年の第一次世界大戦の始まりまでと設定される<sup>54)</sup>。

漱石がロンドンに滞在したのは1900年から1902年までの2年間、まさに世紀末の只中であつた。彼の目に映ったロンドンは「隆々タル希望ト熱烈ナル情操ト青春ノ意気ニ充チタル世ノ中」とは程遠く、否応なく近代化の波にまきこまれていく不安と諦めと頼りない希望の時代であつた<sup>55)</sup>。彼はイギリスに激しい嘲罵の言葉を浴びせる一方、そのイギリスに軽薄に追隨する日本の墮落をも痛烈に批判している<sup>56)</sup>。しかし、この時代が生んだ芸術に関しては強い興味、共感を示していた。例えば「世紀末」の同義語として使われる「デカダンス」についても必ずしも否定的な考えを持っていたのではない。精神の荒廃をもたらす近代化の矛盾と暗部を直視しながらも、文学論ノートには「文学作品に対する価値判断に道徳性が優先してはならない」と記している<sup>57)</sup>。また、世紀末の頹廢的<sup>57)</sup>、「倒錯的<sup>チカダント</sup>」な諸作品と、これと表裏一体の「芸術のための芸術」理論を躍起になって否定するトルストイの論理の不備について世紀末芸術を擁護しても

<sup>58)</sup>  
いる。

「世紀末」が終わったまさに1914年に、ヨーロッパで誕生したコルタサルの世紀末芸術に対する関心については、彼の蔵書や、講義のシラバスからも明らかである。ラテンアメリカには、ロマン主義、世紀末などの文学潮流がヨーロッパより少し遅れて到着した。コルタサルはこれらの潮流と一時に出会ったのである。後で詳述するコルタサルの最初の短編集『向こう岸』1938の序言が、イギリス、ロマン派と世紀末をつなぐ耽美派、マシュー・アーノルドの詩「ドーバーの浜辺」<sup>59)</sup>から採られているのは、このことを象徴するようだ。

さて、ここで漱石、およびコルタサルの作品の源泉になったと考えられる具体的な「世紀末」の作家、作品を見ていこう。

漱石蔵書目録に登載されているテニスン、キーツ、ド・クインシー、ポー、ロセッティ、ホフマン、ゴーティエ、ボードレール、フローベールなどの作品は、世紀末の若いデカダンたちが夢中になって読み耽った手引書のリストと完全に合致している<sup>60)</sup>。同時に、これにフロイトや心理学関係の著作が加わったところまで、コルタサルの愛読書のリスト<sup>61)</sup>とも完全に合致しているのだ。

#### a) ド・クインシー

漱石は学生時代からド・クインシーの『アヘン吸引者の告白』を愛読していたが、本格的に読んだのはロンドン留学時代である。英文学に絶望し、一切の文学書を行李の底に収め、心理学や美学関係の書物を読み出した時、「精読して心の底に記憶されていたド・クインシーの幻想の叙述が、漱石にとって、それまでよりさらに深いレベルで、新しい意味を持つようになってきた。」<sup>62)</sup>コルタサルもド・クインシーについて講義したばかりではなく、あの大著を翻訳までしている。漱石の場合、意識下の神秘幽玄界や超自然的なものへの興味が直接創作に影を落としているのは、初期短編集の『漾虚集』である。この中の諸短編では神秘的な愛の感応を扱ったり(『趣味の遺伝』)、幽霊を研究する心理学者の作中人物を通して霊の感応について語りしている。コルタサルの初期幻想短編集には同じような霊の感応を扱ったものは、プエノスアイレスに住む若い女とブタペストに住む女乞食の魂の入れ替えを扱った『遠い女』、水族館で水槽の中の山椒魚との交感を描いた『山椒魚』、若い恋人の心に移ったドイツ兵の魂を描いた『秘密の武器』など、枚挙に暇がないほどである。

#### b) ゴーティエ

「美シキ奇想ナリ、キーツノレミアニ似タリ、幽遠ノ趣アリテ然モ主意明晰ナリ、…」『全集』第16巻 p. 124 はゴーティエの短編集になされた漱石の書き込みである。最高級の賛辞によって、ゴーティエ(1811-72)は漱石のもっとも好きな作家の一人であることがわかる。「結構モ、思想モ、措辞モ共ニウマイ者デアル。コンナ者ヲ書カウ、カカウト思フテ居ルウチ、

イツノ間ニカコノ男ガ製作シテイタ」と書いていることで、彼がゴージェエのような短編を書くとして、最初の幻想短編集『濠虚集』を著したことがわかる<sup>63)</sup>というのは尹相仁の指摘である。

コルタサルの場合は、死後10年して全集に収められた処女短編集 *La otra orilla* 『向こう岸』の中のいくつかの短編にゴージェエの影響が強くみられる。例えば、*El hijo de vampiro* 『吸血鬼の息子』1938や、同じく未刊行であった第二短編集の *Historia de Gabriel Medrano* 『ガブリエル・メドラノの話』の中の *Bruja* 『魔女』1943がある。前者の吸血鬼も、後者の魔女もおどろおどろしい恐怖の存在というよりは、愛に殉じたどこかやさしい官能的な存在である。これらはゴージェエの幻想短編の代表作の、愛する男の命を絶やすまいと、ためらいがちに血をすす<sup>64)</sup>る『吸血女の恋』のクラリモンドを髣髴とさせる。*Manos que crecen* 『育つ手』という短編は、突如、ひきずるくらいに異様に大きくなってしまった両手を抱える男の驚愕と絶望を描いた荒唐無稽な話だが、ゴージェエの『阿片吸引者倶楽部』などに描かれる阿片による幻覚を思い出させずにはおかない。先に述べた『遠い女』などの短編は、生きた人間同士の魂を相互に入れ替えるという、ゴージェエの『化身』などの一連の化身物<sup>65)</sup>から想を得たものだといえるかもしれない。というより、コルタサル自身がこれらの短編集のサブタイトルとして「剽窃と翻訳<sup>66)</sup>」と書いているところを見れば、コルタサルは意識的にゴージェエを翻案したとも言えるだろう。コルタサルが生前は決してこれらの短編の出版をしようとしなかった原因は、むしろこのあたりにあるのかもしれない。

#### e) ロセッティ

ダンテ・ガブリエル・ロセッティはラファエル前派の創始者であり、中心人物である。漱石的美女の系譜の原型とも言うべき数々の美女の肖像の作者であると同時に、ロマン派の詩人でもあった。

漱石が、後の作品世界に濃い影を落とすことになるラファエル前派と出会ったのは、ロンドン到着後間もなく訪れたテート・ギャラリーの観覧であろう。ここで、例のミレイの『オフエリア<sup>67)</sup>』だけでなく、数々のラファエル前派の絵を見ている。中でも漱石がロセッティに惹かれていたことは、1901年4月、南ロンドン美術館にてラスキンとロセッティの絵を見て「面白カリシ」と日記に感想を記したのをはじめ、8月にはロセッティの家も訪れていること、さらに1902年発行のロセッティ画集<sup>68)</sup>まで購入していることからわかる。目を半ば閉じて水中に漂う優しげな「オフエリア」像が『草枕』の那美さんに被せたかった像だとすれば、元の那美さんはロセッティの描く、強い意志を秘めた瞳で男を見抜く美女であった。漱石は女性ヒロインとロセッティのつながりを作中で明かしている。『虞美人草』のヒロインである魔性の女、藤尾が目をもととしたのは「ロゼッチ詩集<sup>69)</sup>」なのである。藤尾の「燃ゆる黒髪を照る日に打たして身動きもせぬ」姿は、漱石がロンドンの美術館で、また画集を通して脳裏に焼き付けたはずのロ

セッティの神秘的かつ肉感的な女性の肖像を下敷きにして描いた観念上の挿絵といってもいいくらいである。<sup>70)</sup>藤尾だけでなく、『草枕』の那美、『三四郎』の美禰子などのヒロインたちは、ロセッティの美女たちの面影を宿している。

実は、コルタサルもロセッティの女性像が彼の魔性の女の原型であることを、自作の中で明らかにしている。コルタサルの短編『キルケ』の序言は、まさしくロセッティの詩『林檎の谷』の一部である。

魔女の手から林檎を取るとき、その唇から、ひとたびの接吻を受けた。だが林檎を齧ると、眩暈がして、足はよろけ、そうして魔女の足元からみもつれる枝々の間をどうとおちてゆくのを感じた。死者たちの白い顔が、穴の中で自分を迎える—と見たところで、  
…。

ダンテ・ガブリエル・ロセッティ<sup>71)</sup> 『林檎の谷』

コルタサルの魔女がキルケにその起源をもち、ロセッティの「魔女」を直接の源泉として、デリアという娘に化身していることをコルタサル自身が示唆しているのである。漱石もコルタサルも、キーツの『エンディミオン』の中でキルケのイメージに強く反応していた。キルケはキーツ、ロセッティを経て、漱石の女性人物たち、コルタサルの女性人物たちの中に生きていた。

ところで、ロセッティが女性の肖像を描く際に示す毛髪に対するフェティシズム的情熱は有名であるが<sup>72)</sup>、髪に対する執着を、漱石と同様、コルタサルも共有している。藤尾の屍身の描写と、コルタサル『天国の門』のセリーナのその描写を比べてみよう。

変わらぬものは黒髪である。紫の絹紐<sup>リボン</sup>は取って捨てた。有る丈は、有るに任せて枕に乱した。(中略) 乱るゝ髪は、純白な敷布<sup>まっしろ シート</sup>にこぼれて、小夜着の襟の天鷲緞<sup>こよぎ</sup>に連なる。其中に仰向けた顔がある。

『虞美人草』十九

ギターに象嵌してある真珠母のようにきらきら光っている狭い額のはえぎわから陶器のように白く冷たい顔にかけて癖のない黒い髪が流れていた<sup>73)</sup>。

『天国の門』

こぼれ落ちた黒髪が横たわる死顔の白さをいっそう際立たせている描写は、驚くほど似ている。「蒼白い美しき顔をすっぽりと包む豊かな髪は、妖しい笑みを浮かべた口元や催眠にかかったよううっとりした視線とともに、世紀末芸術の〈宿命の女〉の図像にもっとも強調されているディテールであるといつて決して言いすぎではない」<sup>74)</sup> 漱石とコルタサルの初期の作品の

女性像がいかにラファエル前派的想像力に包まれたものであるかがよくわかる。

### 3. 結 論

ともに国民的大作家となった漱石とコルタサルが作家として本格的に活動する前の教師時代を詳しく比較検討した。彼らがなぜ教師になったか、どんな講義をしたか、教師としての評価をどうであったか、そして、何故教師の職を捨て作家の道を選んだかを見た。その経緯も、担当した英文学の講義内容も驚くほど似ていることがわかった。その生い立ち、家庭環境が似ていたということもあったし、およそ半世紀という時代の差や、日本とアルゼンチンという場所の違いこそあれ、彼らの生きた時代は、軍国主義が幅をきかせつつあるきなくさい時代だったという背景もあった。だが、なによりも二人の気質、感性、興味が似ていたのである。それは、父親不在の彼らの作品に表れる女性観が異常に似ていたことからわかる。特に、彼らの初期作品に描かれる〈宿命の女〉的女性像は、二人が偏愛したキーツの詩の中で言及されるギリシャ神話の魔女キルケをそもその起源とすることが明らかになった。

彼らが大学の英文学の教師として講じ、そして愛した、イギリスのロマン主義の詩人キーツや、ド・クインシー、フランスの世紀末を代表するゴーティエ、世紀末の絵画や文学作品や、ラファエル前派の、中でもロセッティなどの影響が、二人の初期作品の中に色濃く見られることが証明できたと思う。

#### 注

- 1) 前田愛、『文学テキスト入門』筑摩書房、1988。
- 2) 拙論「漱石とコルタサル—東西の文学的巨人の類似点について—」京都産業大学論集 外国語と外国文学系列 第26号 1999年3月。
- 3) 拙論『分身殺しのモチーフ—漱石とコルタサルにおけるポーの影響』京都産業大学論集 外国語と外国文学系列 第29号 2002年3月。
- 4) 拙論「漱石とコルタサルの作品の女性像について—宿命の女たち（ファム・ファタール）はなぜ殺されたのか」京都産業大学論集 人文科学系列 第34号 2006年3月。
- 5) Descamps, Jorge R, *Julio Cortázar en Banfield, infancia y adolescencia*, Orientación Gráfica ed. 2004 (バンフィールドのコルタサル、幼年時代と思春期)。  
Martínez Pérez, Felipe, *Julio Cortázar, Profesor en Bolívar* editorial Dukken, Buenos Aires, 2003, (フリオ・コルタサル、ボリバルでの教師)。  
*Fernández Cicco, Emilio, El secreto de Cortázar*, Editorial Belgrano, Buenos Aires, 1999, (コルタサルの秘密、チビルコイでの教師時代)。  
Correas, Jaime *Cortázar, profesor universitario Su paso por la Universidad de Cuyo en los inicios del peronismo*, Aguilar, Bs. As. 2004. (大学教師 コルタサル —ペロニズム初期のクヨ大学における彼の足跡—)。

Montes Bradley, Eduardo, *Cortázar sin barba* 2004, editorial sudamericana, Bs. As. (コルタサル  
ルの家族の歴史や彼の幼年時代、少年時代。出奔した父親のことなど)。

これらはいずれも現地調査とコルタサルと関わりがあった人々とのインタビューや、書簡類、証  
明書などの豊富な資料をもとにした実証的な研究書である。

- 6) 川島幸希, 『英語教師 夏目漱石』新潮選書 2000, この項, 同著に負うところが多いことをお  
断りしておく。
- 7) 同上, p. 127.
- 8) T. ド・クゥインシーは漱石が最もはやくから注目していた作家で特に『阿片常用者の告白』に  
ついては、書き込みのある本が漱石文庫(東北大学図書館所蔵)に残されている。
- 9) 川島幸希, p. 143.
- 10) 漱石の後任として赴任した大学英文学科の後輩玉虫一郎に宛てた手紙(明治29年7月24日付け)。
- 11) 川島幸希 p. 155 「漱石先生と松山」。
- 12) 出口保夫『漱石と不愉快なロンドン』柏書房, 2006, 「主として取り組んできた作品は、シェイ  
クスピアを除けば、18, 19世紀の詩人や小説家たちの主要な作品であるが、なかでも彼がもっとも  
よく読んだと思われるのは、ロマン派詩人たちであった。…漱石の新しい『文学論』の研究に、パ  
トスとしての土台をなさしめているのは、シェリー、キーツらロマン派詩人たちの読書による感動  
であった」 p. 207.
- 13) Julio Cortázar, “La otra orilla” en *Cortázar Cuentos completos* 1, Alfaguara, Bs. As. 1994,.
- 14) Julio Cortázar, *Historia de Gabriel Medrano en La otra orilla*” en *Cortázar Cuentos completos*  
1, Alfaguara, Bs. As. 1994, p. 81.
- 15) Martínez Pérez, Felipe, *Julio Cortázar, Profesor en Bolívar*, Editorial Dukken, Buenos Aires,  
2003, p. 11.
- 16) 近藤英雄『坊ちゃん秘話』青葉図書, 川島幸希, 前掲書 p. 142.
- 17) Martínez Pérez, Felipe, op. cit. p. 13.
- 18) Martínez Pérez, Felipe, *Julio Cortázar, Profesor en Bolívar* editorial Dukken, Buenos Aires,  
2003, p. 32.
- 19) Idem. 女友達 Mercedes Arias や Marcelle Duprat たちと交わした手紙は55通にもものぼる。p.  
36.
- 20) Fernández Cicco, Emilio, *El secreto de Cortázar*, Editorial Belgrano, Buenos Aires, 1999, p. 60,  
71 (コルタサルの教師時代, 特にペロン政権時代の出来事に詳しい)。
- 21) アルベルト松本『アルゼンチンを知るための54章』明石書店, pp. 63-65.
- 22) コルタサルはこの時点ではまだそれほど政治に深くコミットしていたわけではなかった。  
「私は外でペロン, ペロンと叫ぶ声がただわずらわしく, 読書の邪魔だったのだ」と後に告白し  
ている。
- 23) Correas, Jaime は, ボルヘスが見出したので有名なこの作品が, 彼のメンドサ時代の友人で版  
画家の Sergio Sergi の版画「古い家」(巨人が占拠した家から家人が逃げ出している) からインスピ  
レーションを得たという仮説を提出した。p. 91.
- 24) Correas, Jaime *Cortázar, profesor universitario Su paso por la Universidad de Cuyo en los in-  
icios del peronismo*, Aguilar, Bs. As. 2004. p. 21.
- 25) 川島幸希 p. 187.
- 26) 川島幸希 p. 207.

- 27) 明治38年4月7日付 大塚保治宛, 川島幸希 p. 222.  
 漱石が簡単に辞めることのできない事情は, 経済的な問題であった。
- 28) この項は上記 Correas, Jaime の著作『大学教師 コルタサル—ペロニズム初期のクヨ大学における彼の足跡—』に負う部分が多い。
- 29) チビルコイでの元同僚 Lucienne C. De Duprat に宛てた1944年8月16日付けの手紙「ここに来て一ヶ月半になりますが, 心から満足しています。…初めて高等教育の現場で教えることができ, ボードレールの名前を声に出したり, ジョン・キーツの詩句を引用したり, リルケの翻訳を配ったりできるなんて…なんとういう幸せでしょう」。  
 Montes Bradley, Eduardo, op. cit. p. 254.
- 30) Correas, Jaimes pp. 159-166.
- 31) 例えば, A (ward) History of English Literature (Cambridge) など。  
 Lord Houghton, The poetical work of John Keats 1899 は, コルタサルが全訳をした本でもあるが, 今回, 東北大学付属図書館所蔵の漱石文庫の閲覧をさせてもらい, 漱石の書き込みや傍線のある同著を実際に目にし, この手にとって, 漱石の書き込みとコルタサルの興味の在りかを比べてみる事ができた。
- 32) 彼はチビルコイ時代の同僚 Mercedes Arias への手紙で「チビルコイではコムニスト, アナーキスト, トロツキストという疑いをかけられたが, ここメンドサではファシスト, ナチス, ロシスタ, ファランへ党員というレッテルをはられている…」と書いている。1945年7月21日付け Correas, Jaime p. 70.
- 33) このあたり漱石の『坊ちゃん』のストーリーを彷彿とさせる。おそらく松山を去った漱石もコルタサルと同じような心情だったのではないだろうか。
- 34) コルタサルはマリアノ・アコスタ師範学校卒の資格しかなかった。最初, メンドサに到着した際, 地元の新報に大学卒業と誤報されたことが後に問題となった。
- 35) Lucienne C. De Duprat に宛てた手紙「自分の講座は, その年の荒れようには十分に受け入れられるレベルのもだった。ただ, 2回にわたる中断によって通常50回くらいのクラスが28から30回しかできなかったが…学生たちは期待されるレベルより下で, 近代詩人について話そうとするとその課題について戸惑ってしまって, テーマそのものの前に詩とは何かから説明しなければならない。残念ながらレベルを下げるしかなかった…」。
- 36) J. Cortázar, *La otra orilla Cortázar Cuentos completos* 1, Alfaguara, Bs. As. 1994.  
 この短編集は1945年頃書かれ, 雑誌 Martín Fierro のコンクールに応募したが, 落選, コルタサルの死後10年たって, 元妻のはからいで全集に収録された。
- 37) 大学辞職の真相についてコルタサルはいくつかのインタビューで語っている。1967年 Graciela Sola に「自分は美学的な領域の外で起こっているすべてのことには盲目的プチブルである, と定義した上で, 首を突っ込むはめになったアンチペロニスタの運動に失敗したのが原因で辞任した」。  
 Luis Harss には, 「44年から45年にかけてペロンに反対する政治運動に参加したが, ペロンが大統領選に勝った時, 他の上着を着て自分の地位を続けようとして, 結局上着を脱がされてしまう前に自分から辞任を選んだ」と語っている。Los nuestros. Buenos Aires, Sudamericano., 1981.
- 38) 漱石も自らの神経症の治療のために『猫』を書いたことを『文学論』の序で告白している。
- 39) 拙論『分身殺しのモチーフ —漱石とコルタサルにおけるポーの影響』京都産業大学論集 外国語と外国文学系列 第29号 2002年3月 参照。
- 40) 夏目漱石全集, 岩波書店 22巻 p. 70.



- 41) 福島君子「夏目漱石とエドガー・アラン・ポー」参照、『比較文学の世界』南雲堂2005, p. 76.
- 42) 出口保夫, 前掲書, p. 119.
- 43) Julio Cortázar, *Imagen de John Keats*, Alfaguara, Bs. As. 1996, これはコルタサルが1947年前後に書き上げたまま未刊になっていたものを彼の死後刊行されたものである。
- 44) 出口保夫, 前掲書, p. 209.
- 45) 「そう, 今はひどい時代だ。でも1817年もひどかった, それはエンディミオンの年だった」Julio Cortázar, *Imagen de John Keats*, Alfaguara, Bs. As. 1996, p. 43.
- 46) Julio Cortázar, *Imagen de John Keats*, 「二世紀の時を超えて人生と詩作に対して全く同じ考えをもっていた兄弟のような二人(キーツとコルタサル)に敬意を表して…同著裏表紙にある献辞。
- 47) 同上, p. 68.
- 48) 漱石蔵書 *Keats's poetical work*, ed. Lord Houghton, "Endymion" p. 154, p. 157.
- 49) 拙論「漱石とコルタサルの作品の女性像について —宿命の女たち(ファム・ファタール)はなぜ殺されたのか—」京都産業大学論集 人文科学系列 第34号 2006年3月参照。
- 50) コルタサル, 『キルケ』初出 *Bestiario* 1951 『動物寓意譚』所収, 『速い女』ラテンアメリカ短編集, 国書刊行会, 1996, p. 137.
- 51) Ana Hernández del Castillo, "Woman as Circe the Magician" p. 75. *Julio Cortázar Harold bloom*, Ed. CHELSEA HOUSE, Philadelphia, 2005.
- 52) 飛ヶ谷美穂子, 『漱石の源泉』慶応義塾出版会, 2002, p. 94. 「蛇の女」の系譜として漱石の『草枕』の那美さんと『レイミア』の比較あり。
- 53) 尹相仁『世紀末と漱石』岩波書店, 1994.
- 54) 尹相仁『世紀末と漱石』, p. 31.
- 55) 同上, p. 85.
- 56) 漱石全集, 第16巻, p. 104 他多数。
- 57) 『漱石資料 —文学論ノート』岩波書店, 昭和51, p. 71.
- 58) 佐々木英昭『異文化への視線』名古屋大学出版会, 2001, p. 157, トルストイ『芸術とは何か』への漱石自身の書き込みより。(著者の意見では, 漱石の世紀末擁護の姿勢をのみ見るべきではなく, 文化間の習慣の差異をこそ見るべきだと言うのが漱石の主張である。)
- 59) 『向こう岸』序言「そしてわたしたちは暗黒の大地にいるかのごとく／闇夜にぶつかり合う無知な軍隊のように／争いと背走の恐怖に押し流されて／ここにいるのだから—マシュー・アーノルド」。
- マシュー・アーノルドの著書は漱石蔵書にもあり, 書き込み, 傍線もある。
- 60) 尹相仁, p. 108.
- 61) Stavans, Ilan, *Justice to Julio Cortázar*, p. 198.
- 62) 岡三郎『夏目漱石研究』第1巻・意識と材源, 国文社, 昭56, p. 330.
- 63) 尹相仁, p. 110.
- 64) ゴーティエ『吸血女の恋』フランス幻想小説, 小柳保義訳, 文元社, 2004.
- 65) 小柳保義, 『ゴーチエ幻想作品集』創土社, 1990, p. 475, 「解題・ゴーチエにおける幻想の諸相」。
- 66) Cortázar, *Cuentos completos I*, p. 30, "Plagios y traducciones".
- 67) この項, 拙論「漱石とコルタサルの作品の女性像について—宿命の女たち(ファム・ファタール)はなぜ殺されたのか—」京都産業大学論集 人文科学系列 第34号 2006年3月参照。
- 68) 漱石蔵書, *Dante Gabriel Rossetti*, H. Virtue & C., 1902, (The Easter Anual).

- 69) 全集, 第3巻, p. 72.
- 70) 尹相仁 p. 186.
- 71) 前掲書『遠い女』所収 p. 139.
- 72) 尹相仁 p. 189, 絵画だけではなく, 詩でも“髪”を詠っている。例えば『生命の家』収録「うまし夢」。
- 73) コルタサル, 『天国の門』 Las puertas del cielo 『遠い女』所収 p. 169.
- 74) 尹相仁 p. 190.

## Professors of English Literature : Soseki and Cortázar

— The influence of Keats and the Pre-Raphaelite arts in their early works —

Yoko IMAI

### Abstract

Soseki and Cortazar, who were the eminent national writers in their own countries: Japan and Argentina, were professors of English Literature before they became writers.

I compared the periods when they were professors and found many similarities between these two authors. I found out why they became professors, what kind of classes they taught, how they were evaluated as professors by their students and why they abandoned their careers as professors so early, etc. I demonstrate that they were so similar not only in their careers but also in the contents of their lectures: English Literature of the 18, 19 centuries. Because their background was so similar, in spite of the difference of a half century, the ages in which they lived were filled with anxiety at the rise of militarism.

But, above all, their characters, sensibilities and interests were almost identical. The concept of woman was so similar in the work of these two authors, in which the father does not exist. The image of woman “la femme fatale” that is described in their early works originates from “Circe” in Keats’s poetry.

Also I prove that the influence of Keats, T. de Quincy, Goiter, and Rossetti is so evident and great in their early works.

**Keywords:** Soseki, Cortázar, professor of English literature, Keats, fin de siècle